



終末期患者のリクエスト食とQOLの関係：スピリチュアリティに焦点をあてて

著者	成田 千恵
雑誌名	Human Welfare : HW
巻	8
号	1
ページ	132-133
発行年	2016-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027365

〔2014 年度 人間福祉学部優秀卒業研究賞・最優秀賞 要旨〕

終末期患者のリクエスト食と QOL の関係

ースピリチュアリティに焦点をあててー

成 田 千 恵

1. 目的：私は「リクエスト食」の持つ力が、“生きること”や、人間の“スピリチュアリティ”に何らかの影響を与えているのではないかと考えた。そして、リクエスト食がスピリチュアリティ領域を満たす要因であることが明らかになれば、その結果として、終末期患者の全体的 QOL は向上すると考えた。それゆえ、リクエスト食が終末期患者の QOL 向上に影響を与えることを明らかにし、今後の終末期医療への貢献、特に「食」を通じたケアの可能性を探ることを目的として、研究を行った。

2. 問題の背景：病院食は、病気からの回復や健康の保持増進を目的とし、栄養面が考慮された、誤嚥しにくい形態であることが多い。しかし、治療の見込みのもてない終末期の患者様に、そのような食事を提供しても、栄養面以外のニーズを満たすことはできないのではないかと。一人ひとりの好みや価値観に合わせた個別性の高い食事の提供が求められるが、実際、食に関わる語りや、自己決定の背景にまで、耳を傾けてケアする人的・時間的ゆとりはなく、その実現は極めて困難という状況がある。しかし実際には、個別のニーズを満たす食事は必要とされている。

3. 定義：本研究において「終末期患者」とは、あらゆる治療をしても治癒が望めず、生命予後が6ヶ月以内と考えられる患者とする。「QOL」とは、人間の幸福感やニーズに対する満足感を表す主観的概念であり、身体的、精神的、社会的、スピリチュアル的の4つの領域からなるもの、「スピリチュアリティ」とは、生きるための存在の枠組みや自己同一性が失われた時に、自己・他者・大いなるものとの関係性を持ち、新たな「いのちのあり方」や「自己存在の意味」を見出すための人間に備わっている能力や価値観とする。

4. 文献レビュー：(1) 理論 ①マズロー (1972)

は、基本的欲求の階層図は、低次から高次の順に、生理的・安全・所属と愛・承認・自己実現の欲求があることを述べていた。②柏木 (1996) は、人間を全人的な存在として捉え、終末期患者は身体的痛みだけではなく、精神的・社会的・霊的痛みを併せ持っており、この4つは相互に関係しあっていると述べていた。(2) 実証研究 ①大塚、尾岸 (2011) は、3事例の患者の語りの分析を通して終末期における食の意味を示唆した。②吉田、藤井 (2007) は、食事満足度と QOL には関係があること、身体機能の低下と痛みが満足度を低下させることを示唆した。(3) 新たなスピリチュアリティ下位概念のカテゴリー化 竹田、太湯 (2006) と藤井、李、田崎 (2005) のまとめた下位概念を考察し、新たにカテゴリー化を試みた。その結果、スピリチュアリティを①『人生の意味・価値・実感』、②『人との関係性』、③『人を越えた関係性』、④『死について』の4つのカテゴリーにわけることができた。

5. 実証研究：①研究目的：リクエスト食が終末期患者の QOL 向上に影響を与えることを明らかにし、今後の“食”を通じたケアの可能性を探ること ②仮説：「リクエスト食の一連のプロセスは、終末期患者の QOL の構成概念であるスピリチュアリティの下位概念に正の影響を与える。」 ③調査方法：リクエスト食実施予定の終末期患者に、食前・食後の計2回、半構造化インタビューを行った。④分析と調査結果：患者の言葉をテキストデータ化し、意味ごとに分類しネーミングした。その結果、【食事に関すること】【人や環境に関すること】【自己に関すること】での大カテゴリーと、その下位カテゴリーが見出された。そして、仮説「リクエスト食」の一連のプロセスが、スピリチュアリティ下位概念に正の影響を与える」は検証された。また、「リクエスト食」がラ

ライフレビュー様の効果を果たしうることが示唆された。

6. 考察と提言：「リクエスト食」を通して得られた家族やスタッフとのコミュニケーションから“自分は大切にされている” また、“自分は一人ではない” という実感を得ることができたのではないか。そのような実感が、スピリチュアリティ下位概念に正の影響を与えていたのではないか。また、共に食事や記念撮影をした思い出は、家族のケアにも貢献することになるだろう。過去に思いを馳せる「リクエスト食」は、終末期患者が人

生の総決算をすることに、非常に有効な手段となりうるのではないか。以上の考察を経て、次の2点を提言したい。(1) 終末期患者の「食のケア」の重要性に対する理解を、より多くの人に広めることが大切なのではないか（例えば、今後の医療を担う看護学生に、終末期の「食」の重要性を伝える）。(2) 専門家が「食」にまつわるコミュニケーションを積極的に図ることで、終末期患者のライフレビューを促すことが可能になるのではないか。またそれは、終末期患者のスピリチュアルケアにも繋がってゆくだろう。